

BEYOND THE BORDER

INTERVIEW

ジョナサン・クライスバーグ

JONATHAN KREISBERG

8月に自身のトリオで来日して素晴らしい演奏を聴かせたジョナサン・クライスバーグが、ブラジル出身の奇オネルソン・ヴェラスとのデュオ・アルバム『クライスバーグ・ミーツ・ヴェラス』をリリースした。両者の圧倒的な個性と才能が美しく調和した素晴らしい演奏が目白押しだ。早速、その共演作についてクライスバーグに聞いた。

取材：石沢功治

Interviewed by Koji Ishizawa

写真提供：AMSA Records

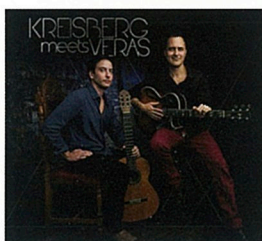
ひと言で言えば、ネルソン・ヴェラスはナイロン弦ギターのモンスターだよ

——ネルソン・ヴェラス(g)と知り合ったきっかけを教えてください。

ジョナサン・クライスバーグ(以下JK)：ニューヨークに移って間もなく、彼のプレイの入ったカセットテープを耳にして驚いてね。その後、パリに行った時、彼にコンタクトをとり、初めて会ったんだ。音楽についていろいろ話したのが交流の始まりで、それから私は彼とのギグをセッティングした。私はエレクトリック、彼はナイロン弦ギターだし、お互いのスタイルもまったく違うけれど、最初の1音を出したときから得も言われぬフィット感があって素晴らしかった。何も言わなくても通じ合うような不思議な感覚をね。

——ネルソン・ヴェラスとのデュオ・アルバムを作ろうと考えた理由は？

JK：ネルソンとの素晴らしいコラボレーションを記録として残しておかなければと前から考えていて、機が熟したと思ったんだ。



『クライスバーグ・ミーツ・ヴェラス』
ジョナサン・クライスバーグ & ネルソン・ヴェラス
AMSA Records
(New For Now Music) AMSA-011

●収録曲 ①リナ・ライジング ②アンティル・ユー・ノウ ③エヴリー・パーソン・イズ・ア・ストーリー ④バイ・ヤ ⑤魚たちの奇跡(ミラグレ・ドス・ペイシェス) ⑥グッドバイ・ポーク・パイ・ハット ⑦ウィンドウズ ⑧フェイス・オン・ザ・パールルーム・フロア ●パーソナル ●ジョナサン・クライスバーグ(el-g)、ネルソン・ヴェラス(nylon string-g)

■現代ニューヨークを代表するギタリストのクライスバーグが、ブラジル出身のヴェラスと繰り広げるギター・デュオ・アルバム。



最初の1音を出したときから得も言われぬフィット感があった

ネルソン・ヴェラス(左)&ジョナサン・クライスバーグ

PROFILE ジョナサン・クライスバーグ(g)

1951年12月26日オハイオ州デイトン生まれ。ピリー・コプハム(ds)、ゲイリー・バートン(vib)、スティヴ・スワロウ(b)、デイヴ・リブマン(sax)らのバンドを経て、1982年、マイルス・デイヴィス(tp)のグループに加入。2016年の「カントリー・フォー・オール・メン」でグラミー賞「ベスト・ジャズ・インストゥルメンタル・アルバム」を連続受賞。www.jonathankreisberg.com/

——3曲はあなたのオリジナルで、5曲はカバーです。選曲はどのように？

JK：とにかくネルソンの即興演奏は作曲と変わらない高レベル！たとえばミルトン・ナシメントの「魚たちの奇跡(ミラグレ・ドス・ペイシェス)」のイントロなどは最たるものだね。反面、彼は曲は作るけれど、譜面に書き留めるのがあまり好きな方じゃなくてね(笑)。そういうこともあって、オリジナル曲は私のだけになった。一方、カバーに関しては、お互いにやりたい曲を持ち寄ってセッションしてみて、その中からより選ったものを収録したんだ。

——セロニアス・モンクの「バイ・ヤ」、チャールズ・ミンガスの「グッドバイ・ポーク・パイ・ハット」、チック・コリアの「ウィンドウズ」を採り上げていますが、個人的にはウェイ・ン・ショーター作でウェザー・リポートの「フェイス・オン・ザ・パールルーム・フロア」が入っていて驚きました。

JK：あれはネルソンの選曲だよ。私もショーターは大好きだから喜んでOKしたし、演奏も素晴らしかったので、アルバムのラストを飾るに相応しいと思ったんだ。

——あなたから見たネルソンはどんなギタリストですか？

JK：とにかくナイロン弦のモンスターだよ。どんな称賛の言葉をもってしても充分じゃない。驚異的な技巧だし、何よりも彼の耳の良さは特筆もので、私が弾いたフレーズやコードなどに対する反応は、信じられないほどの速さで返してくる。それに、それまで

の既存のフレーズなどにとられることなく、常に新しいアプローチを見つけるためのアイデアを模索していて、それはときには破壊的ですらある。

——機材についてです。アルバムで使用したエレクトリック・ギターとアンプは？

JK：ギターは、長年愛用しているギブソンES-175。フェンダー製デラックス・リヴァーブとポリトーンをステレオで鳴らした。

——先日、あなたが自分のトリオで来日した際、丸の内コトクラブでのステージも同じ組み合わせでした。

JK：そう。もしツアー先でポリトーンが調達できない場合は、ローランドのJC-120をオーダーしたりもする。

——ネルソンが使用したナイロン弦ギターはわかりますか？

JK：タカミネだよ。同社の社長でもあった素晴らしい製作家 Mass Hirade (平出益郎。故人)の手による古いギターで、ジーン・バートンシーニから借りているものさそうだ。——最後に今後の予定を教えてください。

JK：ケルテット編成によるアルバムを今年中にリリースしたいと思っている。そこでは自分のオリジナル・ナンバーを中心に予定で、あと何曲か書き下ろさなければならぬといった感じだよ。

